

<オリエンテーション>

A. テーマ：宗教と科学の関係論構築に向けて——ヒック（1）——

B. 演習の目的

「宗教と科学」の関係を現代世界の新しい問題連関において解明することは、現代キリスト教思想研究の中心的テーマの一つに他ならない。本年度は、こうしたキリスト教思想研究の動向について、昨年度のパネンベルクに続いて、ジョン・ヒックのテキストによって、考察を深めてみたい。

ヒックは、宗教的多元主義の代表者として著名な思想家であり、本演習テキストでも、その第一部と第三部は、これまでのヒックの宗教論・宗教哲学で問題とされてきたテーマを取り扱っている。本演習では、まず、第一部の主要部分の内容を確認した上で、「脳神経科学」「心脳問題」などを扱った第二部に進みたい。

ヒックの宗教思想、あるいは現代キリスト教思想全般を理解するに必要となる関連事項については、随時補足説明を行う予定である。また、参加メンバー自身の問題意識に基づく研究発表の機会も設けたい。

C. テキストについて

John Hick, *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave Macmillan, 2006.

D. ヒック (John Harwood Hick 1922 -)

ジョン・ヒック 『ジョン・ヒック自伝 宗教多元主義の実践と創造』

間瀬啓允訳、トランスビュー、2006年。

John Hick, *An Autobiography*, Oneworld Publications, 2002.

「第27章 宗教哲学の現状」

- 1 確率論と認識論
- 2 非実在論とプロセス神学
- 3 三つの新しい方向について

E. 授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方

1. テキストの扱い方

- ・最初の論文から順番に読んでゆく。第一部と第三部を先に読み、最後に第二部を扱う。第一部と第三部は、一回に一章のペースで。第二部はより丁寧に。
- ・数年かけて全体を扱う。

2. 演習参加者の役割

- ・担当者：(1)授業前：読み・訳す・分析する → レジюме作成
要旨・問題点・補足事項
- (2)授業での発表：内容の説明と議論すべき問題の提供
- (3)授業後：まとめ → プロトコール（前回の確認と補足）
- ・担当者以外：テキストの分析
議論への参加

3. 次回以降：前期 4/14, 21, 5/12, 19, 26, 6/2, 9, 16, 23, 30, 7/7

今回は、芦名がヒック宗教哲学の全体像についての説明を行う。

その後の担当の順番を確定する。

なお、4/28, 5/5 は休講にし、テキストは、5/12 より、読み始める。

4. 関連研究会・演習に関して

(1) 演習・研究会「キリスト教思想研究の現在」（月3）

このヒック演習の関連で、研究発表したい人は、こちらの演習・研究会で発表が可能

(2) 研究会「近代／ポスト近代とキリスト教」

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/modernity/index.html>

ヒックや「宗教と科学」関係論にも関連した、近現代のキリスト教思想についての共同研究。個人研究発表を中心に。研究成果の刊行。

(3) マクグラス研究会：毎月一回、*Open Secret*, 2008 を一章ずつ輪読。

(4) 「宗教と科学」データベース (<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub22.html>)

F. 成績について

演習担当 → 平常点

レポート（夏期）

<導入講義>

科学と宗教の対話－その現状と課題－

<内容>

1. はじめに
2. 科学と宗教との関係史
3. 対話をめぐる問題状況
4. 課題

1. はじめに

1. 科学と宗教の関係性、錯綜した状況 → 問題の限定（自然科学とキリスト教）
様々な立場、様々なテーマ・観点・方法、

議論の担い手（個人と集団）の点在、同時にネットワーク化の動向

2. 日本と世界

(1) 日本

- ・「宗教と科学」研究会 (<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/science/index.html>)、
G・コイン他編（柳瀬睦男監訳）『宇宙理解の統一をめざして』南窓社
リンドバーグ／ナンバーズ編（渡辺正雄監訳）『神と自然』みすず書房
Vincent Bümmel (ed.), *Interpreting the Universe as Creation*,
Kok Pharos Publishing House 1991
Paul Davies, *God and New Physics*, J.M.Dent & Sons 1983
Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress 1993
Leo Elders, *The Philosophy of Nature of St. Thomas Aquinas. Nature, the Universe, Man*, Peter Lang 1997
Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether(eds.),
Christianity and Ecology, Harvard University Press 2000
芦名他 『科学時代を生きる宗教—過去と現在、そして未来—』北樹出版
- ・プロテスタント関係者：
マクグラス・ホーキングホーン翻訳関係者（稲垣和久、本多峰子）
聖学院大学・総合研究所（深井智朗、標宣男）
- ・カトリック関係者：柳瀬睦男（『宇宙理解の統一をめざして』南窓社）
- ・科学史研究との関連から：渡辺正雄（『神と自然』みすず書房）、村上陽一郎
- ・科学者サイドから、清水博、清水哲男、泉美治
- ・『岩波講座 宗教と科学』（全10巻、別巻1・2）
- ・南山宗教文化研究所・「科学・こころ・宗教」プロジェクト
龍谷大学・「人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター」
東京基督教大学・共立基督教研究所

(2) 世界：Zygon. *Journal of Religion & Science*, Blackwell (<http://zygoncenter.org/>)

イギリス：ニュートン主義以来の自然神学の伝統

トランス、マクグラス

アメリカ：実践的な問題連関（環境・生命）

Dieter T. Hessel and Rosemary Dadford Ruether (eds.)

Christianity and Ecology. Seeing the Well-Being of Earth and Humans,

Harvard University Press 2000

ドイツ：組織神学の問題連関

パネンベルク、モルトマン

3. 現在の状況を歴史的背景から整理する（→2 関係史）

問題状況を対話という観点から整理する（→3 問題状況）

2. 科学と宗教との関係史

4. 未分化→分化・内的緊張→分裂→対立→無関係・分離→対話・協力あるいは再統合

17、18、19、 20 世紀 1970 年代

争点：12 世紀ルネサンス、コペルニクス・ガリレオ問題とカルヴァンの聖書解釈学、
ニュートン主義とマートン・テーゼ、進化論と科学者集団の登場

5. 芦名定道 『宗教学のエッセンス—宗教・呪術・科学—』北樹出版 1993年
第二部 科学時代の宗教の意義—キリスト教思想史の観点から—
芦名他 『科学時代を生きる宗教—過去と現在、そして未来へ—』北樹出版 2004
6. 「宗教、科学、そして哲学の対立の時期は原理的には過ぎ去った。もちろん、より古い思想時代に逆戻りしてまだ生きているような人も存在してはいるが。我々は寛容の時代に生きている。しかしそれは満足のものではない。なぜなら、それはお互いを認め合ってはいても、統一することはないからである。……我々は常に再統合の時期に向かって努力している。……協力は今日可能な事柄である。これは多くの場所において始められており、これがますます力をまして現実のものとなるという希望を私は表明したい」。(Paul Tillich, Religion, Science, and Philosophy 1963, In: J. Mark Thomas (ed.), *Paul Tillich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer 1988, p.172)
7. 現代の状況あるいは 21 世紀の方向性 (未決定)
 - (1) 過去 (19 世紀・対立) への逆行
 - (2) 20 世紀的現在 (無関係・分離) の反復
 - (3) 新しい関係構築 (対話・協力・再統合)、現代のキリスト教思想の全般的動向

3. 対話をめぐる問題状況

8. 「宗教と科学」関係論：その可能性と射程
 - (1) 基礎論：宗教と科学との関係を問うる理論的根拠 (対話可能性)
 - ①形而上学の再構築あるいは自然神学、科学と宗教の接点としての哲学
→ 知の全体性 (相互連関) の回復
 - ・パネンベルク：偶然性の問題、全体性の問題 (経験の有意味性の構造) = 科学自体が含意しつつも、顕わには神学的問題として立てられるべき問い
 - ・モルトマン：近代精神の分裂状況の克服
ギリシャの存在論的枠組み (コスモス) を聖書的歴史意識・終末論へと転換する
 - ②科学的实在論と宗教的实在論との平行関係 (論理構造の同一性)
隠喩の指示あるいは真理、理論言語の指示対象
 - (2) 思想史：宗教と科学との関係史 (キリスト教思想史+科学史)
 - ・古代のキリスト教神学の成立過程とギリシャの自然学 (無からの創造)
 - ・12 世紀ルネサンスと修道院
 - ・コペルニクス論争とカルヴァンの聖書解釈学 (適応理論)
 - ・17 世紀の近代科学の成立とキリスト教 (ニュートン主義)
 - ・ダーウィンの進化論の前史と科学者集団成立
 - ・古典的な思想家：テイヤール・ド・シャルダン、カール・ハイム、ホワイットヘッド、トランス、アルベルト・シュヴァイツァーなど

・ポストモダンにおける宗教と科学

(3) 実践的倫理的諸問題：宗教と科学が対話・協力できるエートスの形成

①環境：エコロジーと宗教

環境危機に対処するための宗教と科学の協力、環境に優しい、他の生命体と共生するエートスの形成（マクフェイグ・感受性、モルトマン・エートス）

②生命：生命倫理と宗教

③平和・戦争：社会科学（政治学・経済学）とキリスト教

④心・脳・情報：脳神経倫理学とキリスト教

9. 「宗教と科学の諸領域はそれら自身において相互に明確に区別されるとしても、それにもかかわらず、両者の間には、強い相互関係と依存性が存在している」、「宗教のない科学はまっすぐ歩くことができず、科学のない宗教は行き当たりばったりである。」

(Albert Einstein, *Science and Religion* (I.1939, II.1940), in: Albert Einstein, *Out of my later years*, The Citadel Press 1956, p.26)

4. 課題

10. 科学と宗教との接点をいかに確保するか

科学者にして信仰者という個人 → 集団レベルそして理論構築レベル？

個人と集団との関係性

世俗化以降の社会状況で、教会の教義と個人の信仰との関係をどのように構築するのか

11. 研究者のネットワークの構築

「宗教と科学」関係論の全体的な推進

12. キリスト教神学の再構築

時間と空間のバランスの回復（時間偏重、時間－空間の対立図式に対して）

終末論の描くヴィジョン（全体性を問う地平としての終末論）

Theodore Hiebert, *The Yahwist's Landscape. Nature and Religion in Early Israel*,

Oxford University Press 1996

13. 倫理：共生、責任性、共感・配慮というものに基づくエートス

cf. 市民の科学（高木仁三郎 『市民科学者として生きる』岩波新書）

14. 「自然科学とキリスト教」から問題設定を一般化できるか。

宗教倫理学会 (<http://www.jare.jp/>) での議論

自然科学 → 科学一般、キリスト教 → 諸宗教

<文献>

1. Alister E. McGrath, *A Scientific Theology. Vol.1: Nature* T&T Clark 2001

Vol.2: Reality Eerdmans 2002, *Vol.3: Theory* T&T Clark 2003
, *Science & Religion. An Introduction*, Blackwell 1999

(稲垣久和他訳『科学と宗教』教文館)

2. Sallie McFague, *Models of God. Theological for an Ecological, Nuclear Age*, 1987

The Body of God. An Ecological Theology, 1993

Super, Natural Christians. How we should love nature, 1997

Life Abundant. Rethinking Theology and Economy for a Planet in Peril,
2001 Fortress Press

3. Wolfhart Pannenberg, *Toward a Theology of Nature. Essays on Science and Faith*, (ed. by Ted Peters) Westminster / John Knox Press 1993

(深井智朗、標宣男訳『自然と神 自然の神学に向けて』教文館)

Natur und Mensch --- und die Zukunft der Schöpfung (Beiträge zur Systematischen Theologie Band 2), Vandenhoeck & Ruprecht 2000

4. Jürgen Moltmann, *Wissenschaft und Weisheit. Zum Gespräch zwischen Naturwissenschaft und Theologie*, Chr. Kaiser 2002

5. 芦名定道

①基礎論：

「ティリッヒ 生の次元論と科学の問題」、『ティリッヒ研究』創刊号 2000年、
現代キリスト教思想研究会、pp.1-16

「P. ティリッヒと科学論の問題」、『キリスト教文化研究所紀要』

第20号 2002年8月、pp.1-31 東北学院大学キリスト教文化研究所

「ティリッヒとアインシュタイン—人格神をめぐる—」、

『ティリッヒ研究』第5号 2002年9月、pp.1-18

「キリスト教思想と形而上学の問題」、『基督教学研究』第24号 2004年、pp.1-23
京都大学基督教学会

「ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学」、『基督教学研究』第25号 2005年、
pp.21-41 京都大学基督教学会

「自然神学の新たなフロンティア——脳と心の問題領域」、『基督教学研究』第27号
2007年、pp.1-19 京都大学基督教学会

②思想史：

「キリスト教と近代自然科学—ニュートンとニュートン主義を中心に—」、

『京都大学文学部研究紀要』第38号 1999年、pp.147-244

「キリスト教と進化論」、金城学院大学キリスト教文化研究所編『宗教・科学・い
のち 新しい対話の道を求めて』新教出版社 2006年 pp.102-123

『自然神学再考—近代世界とキリスト教—』晃洋書房 2007年

「現代キリスト教思想と宗教批判—合理性の問題を中心に—」、『宗教研究』第82巻、
357-2、2008年、日本宗教学会、pp.227-249。

③実践的倫理的諸問題

「環境問題とキリスト教思想」、『日本の神学』第36号 1997年、日本基督教学会
pp.101-108

「ティリッヒとエコロジーの神学」『ティリッヒ研究』第4号 2002年、pp.1-16

「環境と共生—キリスト教の視点から—」、『比較思想研究』第29号 2003年
比較思想学会、pp.28-35